

第18話 源氏の同士討ち

平家が都を落ちて行った後は、^{のち} 義仲^{よしなか}が京都を守っていたが、^{いなかそだ} 田舎^{どうり}育ちで道理に暗かったために、^{くら} ついに^{むどう} 無道^{おこな}な行いをする。それで、^{よりとも} 頼朝^{よしなかついとう}が^{いんぜん} 義仲^{いんぜん} 追討の院宣を賜り、^{たまわ} 弟^{のりより}の^{よしつね} 範頼^う、^{うじがわ} 義経^{せんじん}らをしてこれを討たせる。^{よしなか} 宇治川^{はいぼう}の先陣、義仲の敗亡。

平家が都を落ちた翌々日、^{ごしらかわ} 後白河^{えいざん}法皇^{くだつて}は^{かえ} 叡山^{よしなか}を下って京都にお還りになり、その翌28日には義仲と行家が兵を率いて入京した。実に、^{ゆきいえ} 平治^{ひき}の乱^{にゆうきょう}に^{へいち} 源^{みなもとの} 義朝^{よしとも}が敗れて東国に走って以来、20余年にして源氏の白旗が都に翻ったのです。

法皇は、その日すぐに^{よしなか} 義仲^{ゆきいえ}、^め 行家^{ついでう}の両人を御所に召されて、平家の追討をお命じになった。昨日までは源氏を追討せよとの院宣を諸国に下し、今日からは平家を追討すべき由の院宣を下される。世の成行きとは言え、^{まこと} 誠に^{ふしぎ} 不思議^{なげ}な事だといつて、これを歎いた者もあったという事です。

平家討伐の論功行賞

院の御所では、^{とうぼつ} ついで^{ろんこうこうしょう} 又、^{とうぼつ} 今度の^{こう} 平家討伐^{ろん}の功^{しょう}を論じて、^{おこな} 賞^{よりとも}を行われることになり、^{よしなか} 第一^{ゆきいえ}を^{よりとも} 頼朝^{のぼ}、^{よしなか} 第二^{じゆ}を^{よしなか} 義仲^{じゆ}、^{よしなか} 第三^{よしなか}を^{よしなか} 行家^{よしなか}としました。^{ゆきいえ} 頼朝^{のぼ}の賞は、^{よしなか} 彼^{よしなか}が^{よしなか} 京^{よしなか}に上^{よしなか}って^{よしなか} 来た^{よしなか} 上^{よしなか}での事として、^{よしなか} 先^{よしなか}づ^{よしなか} 義仲^{よしなか}を^{よしなか} 従^{よしなか}五位^{よしなか}下に^{よしなか} 叙^{よしなか}し、^{よしなか} 左^{よしなか}馬^{よしなか}頭^{よしなか} 兼^{よしなか} 越^{よしなか}後^{よしなか}守^{よしなか}に^{よしなか} 任^{よしなか}じ、^{よしなか} 行家^{よしなか}を^{よしなか} 従^{よしなか}五位^{よしなか}下に^{よしなか} 叙^{よしなか}し、^{よしなか} 備^{よしなか}後^{よしなか}守^{よしなか}に^{よしなか} 任^{よしなか}じたが、^{よしなか} 二人^{よしなか}はその^{よしなか} 任^{よしなか}国^{よしなか}を^{よしなか} 嫌^{よしなか}ったので、^{よしなか} や^{よしなか}が^{よしなか} て^{よしなか} 改^{よしなか}めて^{よしなか} 義仲^{よしなか}を^{よしなか} 伊^{よしなか}予^{よしなか}守^{よしなか}とし、^{よしなか} 行家^{よしなか}を^{よしなか} 備^{よしなか}後^{よしなか}守^{よしなか}とした。

しかし、^{くだ} こういふ^{くだ} 朝廷^{くだ}の命令^{くだ}をお下^{くだ}しになるにしても、^{くだ} 京都^{くだ}に^{くだ} 天皇^{くだ}が^{くだ} お^{くだ}られ^{くだ}ない^{くだ}のには、^{くだ} 法王^{くだ}も^{くだ} 非常^{くだ}に^{くだ} 困^{くだ}られた。^{あんどく} 安徳^{ちようてき}天皇^すは^す 朝^す 敵^すの^す 平家^すが^す お^す 連^すれ^すして、^す 既に^す 都^すを^す お^す 捨^すて^すに^す な^すったので、^す これ^すを^す その^す ま^すま^す お^す 立^すて^すして^す お^す か^すなくとも^す よ^すいと^す 法皇^すも^す お^す 考^すえ^すに^す な^すったのですが、^{さんしゆ} 三種^{じんぎ}の^{ほう} 神器^{ほう}を^{ほう} 奉^{ほう}じて^{ほう} お^{ほう}い^{ほう}で^{ほう}に^{ほう}な^{ほう}っている以上は、^{ほう} 別^{ほう}な^{ほう} 天皇^{ほう}を^{ほう} お^{ほう}立^{ほう}て^{ほう}する^{ほう} わ^{ほう}け^{ほう}には^{ほう} い^{ほう}き^{ほう}ませ^{ほう}ん。

法皇は平家に対して、^{あんどく} 安徳^{おお}天皇^{おお}をお返^{おお}しする^{おお} ようにと^{おお} た^{おお}び^{おお}た^{おお}び^{おお} 仰^{おお}せ^{おお}られたが、^{おお} 平家^{おお}はその^{おお} 仰^{おお}せ^{おお}には^{おお} 従^{おお}わ^{おお}な^{おお}か^{おお}つた。^{おお} よ^{おお}んど^{おお}ころ^{おお}なく、^{おお} つい^{おお}に^{おお} 寿^{おお}永^{おお}2^{おお}年^{おお}8^{おお}月^{おお}20^{おお}日^{おお}、^{おお} 法皇^{おお}は^{おお} 安徳^{おお}天皇^{おお}の^{おお} 弟^{おお}の^{おお} 尊^{おお}成^{おお}親^{おお}王^{おお}を^{おお} 立^{おお}て^{おお}て^{おお} 天皇^{おお}と^{おお} さ^{おお}れた。^{おお} 第^{おお}82^{おお}代^{おお}後^{おお}鳥^{おお}羽^{おお}天^{おお}皇^{おお}と^{おお} 申^{おお}し^{おお}上^{おお}げ^{おお}る。^{おお} つ^{おお}ま^{おお}り、^{おお} 平家^{おお}の^{おお} 奉^{おお}じて^{おお}い^{おお}る^{おお} 天皇^{おお}と、^{おお} 同^{おお}時^{おお}にお^{おお}2^{おお}人^{おお}の^{おお} 天皇^{おお}が^{おお} 出^{おお}来^{おお}た^{おお}ので^{おお}す。^{おお} 時^{おお}に^{おお} 安徳^{おお}天皇^{おお}は^{おお} 6^{おお}才^{おお}で、^{おお} 後^{おお}鳥^{おお}羽^{おお}天^{おお}皇^{おお}は^{おお} 4^{おお}才^{おお}で^{おお}した。

義仲の不平

さて、^{よしなか} 義仲^{よしなか}は、^{よしなか} 敵^{よしなか}の大^{よしなか}軍^{よしなか}を^{よしなか} 打^{よしなか}ち^{よしなか} 破^{よしなか}つて、^{よしなか} 真^{よしなか}っ^{よしなか} 先^{よしなか}に^{よしなか} 京^{よしなか}都^{よしなか}に^{よしなか} 入^{よしなか}り、^{よしなか} 無^{よしなか}道^{よしなか}な^{よしなか} 平家^{よしなか}を^{よしなか} 追^{よしなか}い^{よしなか} 出^{よしなか}した^{よしなか}ので^{よしなか}す^{よしなか}から、^{よしなか} 今^{よしなか}度^{よしなか}の^{よしなか} 平家^{よしなか}追^{よしなか}討^{よしなか}の^{よしなか} 功^{よしなか}は、^{よしなか} 勿^{よしなか}論^{よしなか}、^{よしなか} 自^{よしなか}分^{よしなか}こ^{よしなか}そ^{よしなか} 第^{よしなか}一^{よしなか}である^{よしなか} べき^{よしなか}だ^{よしなか}と^{よしなか} 思^{よしなか}つて^{よしなか}い^{よしなか}た^{よしなか}のに、^{よしなか} 東^{よしなか}国^{よしなか}に^{よしなか} 居^{よしなか}座^{よしなか}つ^{よしなか}た^{よしなか}ま^{よしなか}まで、^{よしなか} 一^{よしなか}度^{よしなか}も^{よしなか} 進^{よしなか}んで^{よしなか} 平家^{よしなか}を^{よしなか} 討^{よしなか}ち^{よしなか}も^{よしなか}し^{よしなか}ない^{よしなか} 頼^{よしなか}朝^{よしなか}が^{よしなか} 第^{よしなか}1^{よしなか}と^{よしなか}なり、^{よしなか} 自^{よしなか}分^{よしなか}が^{よしなか} 第^{よしなか}2^{よしなか}と^{よしなか}な^{よしなか}った^{よしなか}ので、^{よしなか} 不^{よしなか}平^{よしなか}に^{よしなか} 思^{よしなか}つて^{よしなか}い^{よしなか}た^{よしなか}と^{よしなか}ころ^{よしなか}に、^{よしなか} 天^{よしなか}皇^{よしなか}を^{よしなか} お^{よしなか}立^{よしなか}て^{よしなか}する^{よしなか}に^{よしなか} 就^{よしなか}いて^{よしなか}も、^{よしなか} 彼^{よしなか}の^{よしなか} 意^{よしなか}見^{よしなか}が^{よしなか} 用^{よしなか}い^{よしなか}られ^{よしなか}な^{よしなか}か^{よしなか}つた^{よしなか}ので、^{よしなか} これ^{よしなか}を^{よしなか}も^{よしなか} 不^{よしなか}平^{よしなか}に^{よしなか} 思^{よしなか}つた。

彼の考^{よしなか}え^{よしなか}に^{よしなか} 依^{よしなか}ると、^{よしなか} 今^{よしなか}度^{よしなか}、^{よしなか} 源^{よしなか}氏^{よしなか}が^{よしなか} 義^{よしなか}兵^{よしなか}を^{よしなか} 挙^{よしなか}げて、^{よしなか} 無^{よしなか}道^{よしなか}な^{よしなか} 平^{よしなか}氏^{よしなか}を^{よしなか} 討^{よしなか}つ^{よしなか} よう^{よしなか}に^{よしなか} な^{よしなか}った^{よしなか}のは、^{よしなか} 全^{よしなか}く^{よしなか} 以^{よしなか}仁^{よしなか}王^{よしなか}の^{よしなか} 令^{よしなか}旨^{よしなか}に^{よしなか} 依^{よしなか}つた^{よしなか}の^{よしなか} だ^{よしなか}から、^{よしなか} 王^{よしなか}の^{よしなか} 御^{よしなか}子^{よしなか}を^{よしなか} お^{よしなか}立^{よしなか}て^{よしなか}する^{よしなか}のが^{よしなか} 当^{よしなか}然^{よしなか}である。^{よしなか} の^{よしなか}み^{よしなか}な^{よしなか}ら^{よしなか}ず、^{よしなか} 後^{よしなか}白^{よしなか}河^{よしなか}法^{よしなか}皇^{よしなか}が^{よしなか} 清^{よしなか}盛^{よしなか}の^{よしなか}た^{よしなか}めに^{よしなか} 鳥^{よしなか}羽^{よしなか}殿^{よしなか}に^{よしなか} 押^{よしなか}籠^{よしなか}め^{よしなか}ら^{よしなか}れた^{よしなか} 折^{よしなか}に、^{よしなか} 高^{よしなか}倉^{よしなか}上^{よしなか}皇^{よしなか}は^{よしなか} 平家^{よしなか}の^{よしなか} 権^{よしなか}勢^{よしなか}を^{よしなか} 憚^{よしなか}つて、^{よしなか} 何^{よしなか}の^{よしなか} ご^{よしなか} 処^{よしなか}置^{よしなか}を^{よしなか} も^{よしなか}な^{よしなか}さ^{よしなか}ら^{よしなか}な^{よしなか}か^{よしなか}つた^{よしなか}のに、^{よしなか} 以^{よしなか}仁^{よしなか}王^{よしなか}

第18話 源氏の同士討ち

は御身を棄てて法皇にご孝行を尽されたのであるから、その点から言っても、王の御子をお立てするのが当然である、というのでした。

一応は道理に合った言い分だが、しかし、先帝の皇子が幾人もおわしますのに、親王にもならなかった方の王子をお立てすることは、嘗て例のなかった事ですし、又、時の摂政も、前関白も、左大臣も、右大臣も、1人として義仲に賛成しなかったもので、法皇には、彼の不服などにはご頓着もなく、後鳥羽天皇をお立てしたのでした。

義仲の無作法

義仲は、これらの不平が重なって来ると、勢い公卿らに対しては勿論、時には法皇に対してさえ、無礼な態度を取るなどがあったので、朝廷は次第に彼を疎んじた。のみならず、元来、義仲は木曾の山中で成長して、平家を亡ぼす事をのみ目的としていたのですから、大将としては中々立派で、軍には強かったが、朝廷の礼儀作法には通じていなかったもので、その点でも公卿らとの折合いの悪いことが多く、次第に嫌われ憎まれるようになって来ました。

彼が武骨で、無作法であった話にこういうのがあります。

無塩の平茸

その頃、猫間の中納言光隆という人がいた。ある時、義仲に相談すべき事があって訪ねて来た。家来が「猫間殿がおいでになりました」と取次ぐと、義仲は大いに笑って、「何、猫が来た？ 猫は人に会うか？」といった。「猫ではありません。猫間の中納言殿とて、お公卿さまです」というと、それならばと会って暫く話していたが、やがて家来を呼んで、「何なり有合わせでご飯をあげい」という。中納言は呆れて、頻りに止めたが、「食事時に参られたのに召し上がらない筈はない。食うべき時に食わねば、腹が空いてたまらない、急げ急げ」という。

木曾の山の中では、魚などは大抵が塩付けであるから、生のものは無塩といって殊に珍重されていたので、義仲は、何でも新しいものをば無塩というものと思い、「無塩の平茸もあったはずだ。お帰りにならない先に早くせい」と急き立てるので、中納言はとんだ所に来て恥を搔くとは思ったが、今更帰るわけにもいかないの、いすべき事もはかばかしくいわずに、堅くなっていると、やがて大きな塗椀のところどころ剥げたのに、黒い糸交じりのご飯をこてこてと盛り上げて、お菜を三種と、平茸の汁一つとを薄い角盆に載せて持ってきて、中納言の前に置いた。義仲の前にも置いた。

義仲は直ぐに箸を取って食べ始めたが、中納言は青くなって食べずにいる。義仲はこれを見て、「どうして猫殿は召し上がらない？ 無塩の平茸は、京都にも決してありませんぜ。猫殿、さ、おやりなさい、おやりなさい」と勧めるので、中納言はいかにも穢く思ったが、相手は物を知らない田舎者だし、食べないでは悪かろうと、食べる体裁だけに箸を取って、中を窪くつつき散らして、下に置いた。義仲は何も残さずに食べて終わって、「ああ、猫殿は小食だなあ！ それにしてもたまたまおいでなのに、今少しおやりなさい、おやりなさい」と猫殿、猫殿と繰り返した。

第18話 源氏の同士討ち

礼装の義仲

また、こういう話もある。ある時、**義仲**は院の御所に参上しようとしたが、既に官も位も戴いたのだからと、初めて狩衣に立烏帽子を着けて、牛車で行くことにした。乗る車もはじめてなら着る装束もはじめてだから、立烏帽子の先から指貫(注：昔の袴の一種)の裾まで、何となくぎこちなく突張ったのを、そのまま歪みなりに車に乗ると、牛飼は、もと**宗盛**の牛飼で、いくらか敵を討つつもりもあったのか、門を出ると、いきなり強く一鞭当てた。

牛は忽ち逸散に駆出す。**義仲**は車の中で仰向けに倒れた。蝶の羽を拵げたように、左右の袖を拵げ、足を拵げて、起きよう起きようとするけれども、どうしても起きられない。**義仲**は、「やれ童、よれ童」というと、牛飼は留めよという事だとは分かっていたが、構わずになお鞭を当てたので、牛はいよいよ勢いづいて、車は気が違ったように京都の大通りをがらがらと凡そ六七町(約700m)も駆けて行った。

そのうちに、**義仲**の家来が馬でおいかけて来て、牛飼を叱りつけて、やっと留めさせたが、その時には**義仲**は汗をびっしょり掻いて、目を白黒していた。迎も、これが鎧を着て、馬に乗っている時の、あの凛々しい立派な大将と同じ人とは見えなかった。

こういう話がつぎつぎに京都の人々に伝えられると、彼らはこの大将を蔭で野蛮人か何かのように考えて、その田舎者まるだしの無作法を、こそこそばなしの種などにして興がった。従って彼らの兵力を恐れはしても、彼れの人物を尊敬はしなかった。

義仲の兵の乱暴

それに、もう一つ、**義仲**の人望を一層失くしたのは、その部下の兵の乱暴でした。京都は既に平家がさんざん荒らして行ったあとだし、もともと狭い土地でもあるのに、**義仲**は何万という北国の軍勢を率いて来て、そこに留めて置いた。自分さえも宿所がなくて、法皇から戴いたくらいですから、部下の何万という兵らに宿所のあろう筈がない。

彼らはどこなりと都合のよさそうな所に勝手に陣取っていたが、持って来た兵糧がいつまでもある筈がなかったので、食べる物がなくなって困ってくると、10人、20人と隊を組んで都の中を荒らしまわり、金持ちの家などにはどやどやと押し入って、金銀や食物を始め、道具でも、着物でも、金目のありそうな物は何でも奪った。又、馬の飼葉がなくなると、折角、百姓の作った稲や野菜を片っ端から刈取って馬に食わせたりした。

又、中には道を行く者の着物を剥いだり、持った荷物を奪ったりする者もあったので、しまいには、市民は皆こわがって、外へ出る者すらもなくなった。平家は奢って、わが俣をこそしたけれども、源氏のように泥棒はしなかった。これならまだ平家の方がまだと行って、人々は互いに歎き合ったという事です。

平家の大宰府落ち

ところで、平家の方はその後どうなったのでしょうか？ 福原から船に乗って筑前の大宰府に向ったことは前にも述べた。

8月17日に平家は大宰府に着くと、その附近の武士で、平家の身方に来たものがいたので、早速、仮の御所を造って安徳天皇を入れ奉り、ここに暫く落ち着いて大いに勢いを盛返すつもりでいた。

ところが、豊後の国の緒方三郎維義という豪族が、平家を九州から追い出せという法皇の御命令を受けたと称して、急に何万という大兵を率いて攻寄せたので、平家はあわてて大宰府を落ちて箱崎の浦（博多湾）に逃げた。折柄雨がひどく降る中を女たちまで徒はだして逃げたというので、その追撃は余程急であったのでしょう。

幸い、山鹿の兵藤次秀遠という身分の武士が、数千騎で途中まで迎えに来たので、彼の山鹿の城に入ってほっと一息したが、忽ち又、そこにも敵が押寄せて来ると聞くと、そこからは小船に乗って豊前の柳が浦（大分 宇佐）まで逃げた。

萍のような平家の一門

すると、今度は長門の国から源氏が押寄せるといので、あわてて小さな魚船に乗って、あてもなく海に浮かんだ。この時、重盛の3男の清経は、都を源氏に追われてから、わけもなく西に行き東に行きする萍のような一門の前途をはかなく思ったのか、ある月の夜に、船端に近く立って、横笛を吹いて歌を歌っていたが、やがて静かに経を読み、念仏して、海に身を投げました。人々は泣き悲しんだがどうしようもないのです。

屋島の仮御所

しかし、どこに遁れても、立ち直ることが出来ようか？ 平家の人々は小さな漁船に乗って、ただ海に浮かびながら、心細く思っていたが、平家の運はまだ全くは尽きていなかった。長門の国は知盛の領地であったので、彼の代わりに国守の事務を執っていた者が、平家が漁船に乗った事を聞くと、急いで国内から大きな船を130艘ほど選びだして献上したので、平家はこれに乗り移って四国に渡った。

そこでは阿波の国の田口成能という豪族が真っ先に立ってお迎えして、讃岐の屋島の浦に仮の御所を造って安徳天皇を入れ奉った。



香川 讃岐の屋島

平家の勢力挽回

さて、平家がここに落ち着くと、四国の豪族は陸続と馳せ集まって身方になる。長門は、前にもいったように、知盛の領国ですから、彼は今の関門海峡を固めて、次第に附近に勢力を拡げ始めた。幸

第18話 源氏の同士討ち

いとないかい
い、瀬戸内海に沿った国々の源氏の勢力はまだ大して大きくはなかったの、だんだんと平家の勢いがよ
くなつて来た。 時々船を出して、播磨から備前、備中の国々を守っている源氏を攻めたりして見ると、
いつも平家の運がよくて、備中の水島では、義仲の先手となって下つて来た7,000余騎をさんざんに打破
り、その大將を二人共に討ち取って、大いに氣勢を揚げました。

よしなか びつちゆう くだ 義仲、備中に下る

よしなか よわむし とり さと こうもり こしゃく
義仲は都でこれを聞くと、平家の弱虫めらが鳥なき里の蝙蝠で小癩なまねをする、と大いに怒って、
ただ一揉みに揉潰してくれようと、急に一万余騎を率いて備中に馳下り、既に全軍に命を下して屋島に押
し寄せようとしていると、都の留守に残しておいた樋口次郎兼光から大急ぎの密使が来た。 法皇が行家
の讒言を信じになって、義仲を討てという院宣を下しになったと知らせて来たのでした。

よしなか 義仲、京都に帰る

よしなか み あ すなわ
義仲もこれには大いに驚いたが、自分の身の明かりを立てる事が平家を討つよりも先であるから、乃
ち平家はそのままにして置いて、急いで都に馳せ帰る。 彼が攝津の国を経て帰ると聞くと、行家は、そ
れと引違いに、1,000余騎の部下を率いて丹波路から播磨の国に下って行った。

よしなか み み きよと おびや こと
義仲が都に帰ると、その軍勢は再び京都の市中に充ち満ちて、市民を極度に脅かした。 殊に今度
は、折角備中まで下りながら軍もせずして馳帰って来たので、一つは手持ち無沙汰も加わって、その乱暴
は以前よりも烈しくなった。

かっつ みだれ はい しらはた じゅうみん おだ はし
勝手に家々に乱れ入って、その門には白旗を立てて住民を追い出し、今食べようとして箸をつけ
た茶碗の飯さえも奪い取る。 追剥や強盗は言うまでもない。 堂や塔や卒塔婆の類を毀して薪とも
した。 その狼藉の一通りでないことは、殆ど人間のする事とは思われないほどでした。

つづみほうがん 鼓判官

この為に民が非常に難儀をしているということを法皇にはお聞きになると、壱岐判官知康という者を義
仲の許へ使いにおやりになって、源氏の兵の乱暴を取鎮めるようにと仰せわたされた。 ところが、この
知康は有名な鼓の名人で、世間から鼓判官と呼ばれていたのを義仲は聞いていたから、法皇の仰せには
ご返事を申さずに、「おお、お前さんの事を鼓判官というのは、人に打たれたからか、それとも張られた
からか」といつもの乱暴な口調でからかった。 知康は、返事もせず、急いで帰って、法皇の御前にま
いって、「義仲はご命令に服しません。 早くご征伐なさいませ。 謀反をたくらんで居ります」と申し
上げたので、法皇には、然らば好きなように致せ、と知康に言いつけになった。

しかし、平家は今、西海に浮かんでいる。 頼朝は東国にいる。 都にいる武士といえ、悉く義
仲の指図を受けている者共です。 知康は身方として、先づ三井寺や延暦寺の僧兵を始め、町のごろつき
や乞食坊主のような者までも雁集めて、院の御所の法住寺殿の壕を深くし、柵を構えて立籠もった。

そのうちに、義仲が法皇のご機嫌を損ねたということが世間に知られると、今まで義仲に従っていた
者も、次第に彼に背いて院の御所に参ったので、ついにはその軍兵が何万という数に上ったといわれる。

第18話 源氏の同士討ち

ともやす そうしきかん だいとくい あかち にしき ひたれ かぶと
知康はこの総指揮官を仰せつかったのだから、大得意で、赤地の錦の直垂に胃だけをかぶり、片手には
ほこ やまぶし すず ごうれい てんぐ
鉾を持ち、片手に山伏などの持つ鈴を持って、号令をかけた。その姿は、まるで天狗でも付いたようで、
すこぶ こっけい
頗る滑稽であったという。

義仲、法住寺殿に押寄せる

よしなか ちようてき う つづみ ざんげん そうい
義仲は自分が朝敵となつて討たれるのだと聞くと、さてはあの鼓めの讒言に相違ない。よし、そ
ぎ おしよ つづみ にわ
の儀ならば、押寄せて、あの鼓めを打って、打って、皮の破れるまで打ちのめしてくれると、俄かに部下
の軍勢に打ち立つ命令を下した。この時、家来の今井兼平や樋口兼光は、「たとえ、いかような事であろう
とも、法皇の御所へ押寄せるというような事は、臣下として決してすまじき事です」といって諫めたが、義
なか き
仲は聴かずに御所に押寄せた、寿永2年11月19日の朝の事であります。

御所に立籠もつた軍兵は、数こそ多かつたが、所謂烏合の勢の事ですから、義仲の軍勢が勢いよくど
つと關を作つて押寄せて、火攻めにしようと忽ち火を御所の北方に放つと、公卿殿上人を始め、僧兵も、
軍兵も、われ先にと逃げ出して、防ごうとする者などは一人もいなかった。総大将の知康も、人より先
に逃げ出したが、余りにあわてて、手に鈴を持っていることを忘れて駆け出したので、駆ければ駆けるほ
ど、鈴がからんからんと鳴った。よしなか ほつとうにん に
義仲の兵がそれを聞きつけて、「あの鈴を持った男が発頭人だ。逃が
すな。い き さけ ともやす ほう だ
射よ。斬れ」と叫んだので、知康もびっくりして、鈴を抛り出して逃げて行った。大将がこ
れでは軍の出来よう筈がない。あとはもうめちやくちゃです。よしなか ひさ いくさ たい
義仲の兵らは、久しく軍がなくて退
くつ よ さいわ あば えら いくにん
屈していたところですから、好い幸いに暴れまわつて、罪もない公卿や偉い坊さんなどまでも幾人も殺
したりした。

義仲の無道

よしなか むどう
義仲は法皇を別の御殿に押籠めた上に、勝手に多くの役人の官職を停め、自分は院の御厩の別当に
おしな いば むどう おこな う こう
押成つて大に威張つた。皇室に対して無道の行いのあつた平家を討つて功を立てながら、自分がまた
同じ無道を行つたのです。いなかそだ わ
いかに田舎育ちであつたとはいえ、彼は余りにも物の道理が分からなすぎた
のです。むちむがく ため
勿論、これが無知無学の為であつたのはいうまでもない。

よしなか ないしん
さて頼朝は、遥かに鎌倉でこれを聞くと、いよいよ義仲を討つべき時が来たと思つて、内心喜んだ。
ちやくりゆう よしなか いくさ つごう せんりよう
同じく源氏とはいえ、嫡流でもない義仲が、ただ軍都合が好かつたばかりに早く京都を占領して、
ものがお ふるま にがにが
わが物顔に振舞っているのを彼は苦々しく思つていたのです。

義仲追討の院宣

よしなかついとう いんぜん
ただ、今まではこれを討つ好いきっかけがなかつたが、今度のこの義仲の無道は、彼に好い征伐の口実
あた を与えてくれた。それで、ちやくちやく じゅんび おり ごしらかわ ないみつ つか くだ
着々とその準備をしていると、折から後白河法皇から内密のお使いが下つ
よしなかついとう いんぜん たまわ よりとも のりより よしつね さづ うち せた
て、義仲追討の院宣を賜つた。即ち頼朝は弟の範頼と義経に60,000余騎の兵を授けて、宇治、勢多の
りようどう せめのぼ
両道から都に攻上らせることにした。

よしなか
義仲と平家

この時、^{よしなか}義仲は^{ほう}法皇を奉じて都で^{けんい}権威を振るっていたが、平家と^ふ鎌倉勢とを前後に敵としては大変だ
 と思ったので、^{ひとま}一先づ平家とは和睦して置くことにしようと、^{つか}使いを^{やしま}屋島に出した。ところが、平家の
 方では、^{あんどく}こちらには^{たいとう}安徳天皇がおいでになるので、^{わぼく}対等の和睦は出来ない。これまでの罪を^{つみ}わびて^{こうさん}降参
 して来るならば許してやろうと答えたので、^{よしなか}義仲は「^{よしなか}義仲ともあるものが降参なんぞ出来るか」と大いに
 怒って和睦は成立しなかった。

さて一方、^{まっすぐ}鎌倉勢が都に攻め入るには、^{せ た}東海道から真直ぐにのぼって、近江の^{勢多川}を渡るか、伊勢
 から^{い が}伊賀、^{やましろ}山城の間道を進んで、^{かんどう}宇治川を渡るしかないが、^{すす}敵とてこの二つの川の橋を引いて^{う ちがわ}防御の陣を
 張るにきまっているから、^{わた}馬でも川を渡らなければならない。それには馬が良くてはならないので、^ひ出陣の間際になって、^{ぼうぎょ}源氏の武士らは互いに競って良い馬を手に入れようとした。

いけづき するすみ
生唆と磨墨

その頃、^{よりとも}頼朝には2匹の名馬があった。^{いけづき}生唆と^{するすみ}磨墨とです。^{こと}殊に^{いけづき}生唆は世に^よ並びなき名馬といわ
 れた。^{くろくりげ}黒栗毛の馬で、人も馬をも^{そば}側には^よ寄せ付けずに^{つかい}飼葉を食るといので、^{たべ}生唆という名が付いた。^{いけづき}
^{するすみ}磨墨はその毛が誠に黒く、^{すみ}墨を^す磨ったようでしたから、^{するすみ}磨墨という名が付いたのです。^{のりより}大将の^{範頼}を始
 め、^{いけづき}生唆に目をつけたものは大勢いたが、^{よりとも}頼朝は誰にもこれはやらなかった。^{かぢわらかげとき}梶原景時の子の^{げんた}源太景季
 もそれを欲しがった一人でした。^{かげとき}前にもいったように、^{いしばしやま}景時には^{かつせん}石橋山の合戦に破れた時に^{いのち}命を助け
 られたので、^{よりとも}頼朝も、これには一概には^{いことがい}断れなかった。^{ことわ}生唆こそは、^{いけづき}万一自分が出陣する場合には乗
 らなければと、^{かげすえ}代わりに^{するすみ}景季に磨墨を与えた。

ところが、その翌日の早朝、近江の国にいた^{よく}筈の^{はず}佐々木四郎高綱が^{さ さ き}頼朝の^{しろうたかつな}館に来て、何か言いたげ
 な様子をしている。^{よりとも}頼朝は不審に思っ、^{ふ しん}「^{おんみ}御身は近江から直ぐに^{おうみ}京都に向うことと^{むか}思っていたのに、
 いつ来たのか？」と問うた。^{たかつな}高綱は、「^{いのち}命を君に^{きみ}奉って^{たてまつ}戦場に出るのですから、^{せんじょう}再び生きて^{かえ}還れる
 とは思うべきではありません。せめて今一度お目にかゝった上でと^か考え、近江から3日で^か駆けつけまし
 たが、その為^{こま}に馬を乗りつぶしてしまっていて困っています」と答えた。

さ さ き たかつな
佐々木高綱

^{よりとも}頼朝はそのやさしい^{こころざし}志に感心して、「^{かんしん}思うに、^{よしなか}義仲は、^{さだ}定めて宇治、^{勢多}の橋を引いて防ぐであろ
 う。^{せんじん}宇治川の先陣は出来まいか？」という、^{たかつな}高綱は、「^{おうみそだ}わたしは近江育ちの者ですから、^{まちか}間近い宇治
 川の^{ふか}深さ、^{あさ}浅さ、^{ふち}淵も^せ瀬も^{くわ}委しく^{ぞん}存じて居ります。^お宇治川に向いますならば、^{むか}先陣は^{たかつな}高綱がいたします」
 という。^{よりとも}頼朝はこの^{たかつな}高綱の兄弟にも^{あぶ}石橋山で危ない時に助けられた事のあるのを思い起こして、^{おも}然らば
 これで先陣するようと、^{れい}例の^{ひぞう}秘蔵の^{いけづき}生唆を^{たかつな}高綱に与えた。

^{たかつな}高綱が大喜びで出ようとする、^{よりとも}頼朝は、この馬は^{のりより}範頼も^{かげすえ}景季も^ほ欲しがったのだから、その^つ積もりで、
 と^{とく}特に^そ言い添えた。^{たかつな}高綱はそれには^{ちやくせつ}直接には^{こた}答えずに、^{かしこ}また^か畏まって、「^{いた}宇治川の先陣は必ず致しま
 す。^{たかつな}高綱が若し^も軍以前に^{いくさ}死んだとお聴きになりましたら、^き先陣は^{わた}人に渡されたものとおぼしめし下さ

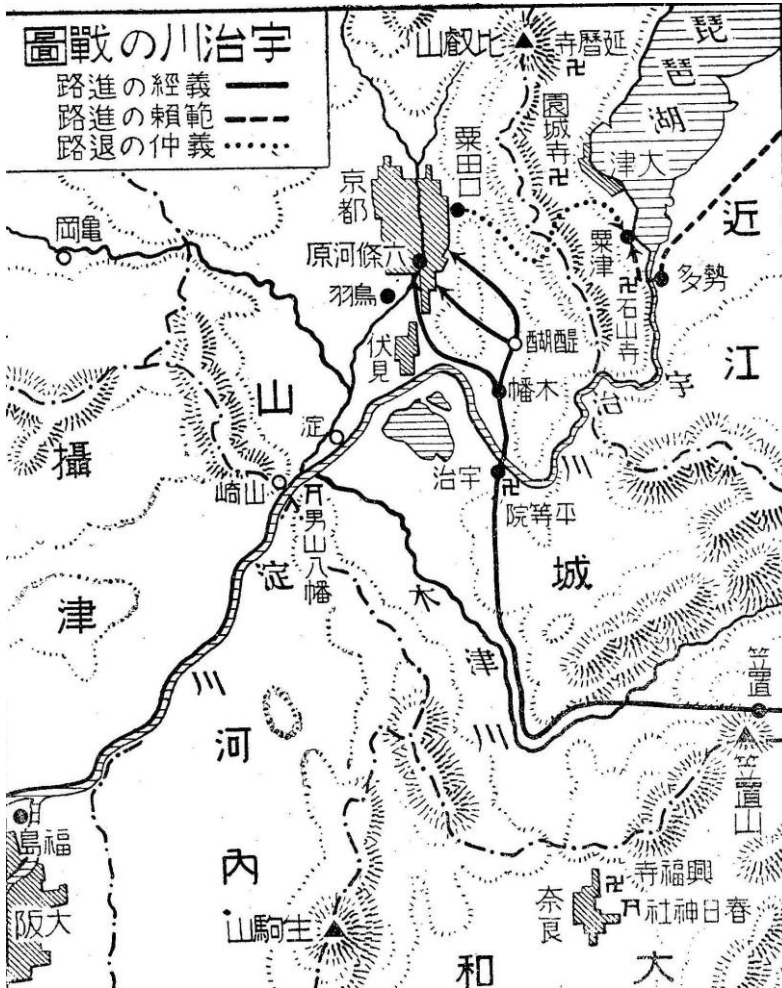
い。戦場に生きていとお聞きになりましたら、先陣は高綱が渡したものとおぼしめし下さい」と、きっぱりと言葉を番えて、頼朝の館を出た。

総軍は既に昨夜のうちに鎌倉を出発したので、高綱は家来と共に 17 騎で、急いでそのあとを追って、翌くる日、駿河の国の浮島ケ原で追い付いた。

梶原景季

この時、梶原景季は小高い丘の上に立って、下を通る馬を見下ろしながら、自分の磨墨に勝る馬のいないのを大得意でいると、ふと、鐘を打つような高い嘶きが 3 聲、4 聲、遠くから聞こえた。生唼の聲である。はてな！ 頼朝公が今ごろ出陣なさる筈はない。空耳かと思っていると、やがて彼が睨めつけている目の前を、馬丁が六人で、たしかに生唼を引いて通る。景季は躍起になって、「誰の馬か？」と家来に訊かすと、佐々木四郎高綱の馬だという。景季は嚇と怒って、「景季があればほどお願いしたのに下さらぬ馬を高綱に賜るとは残念だ！ よし、それならば、ここで佐々木と刺し違えて、2 人の勇士を失くさせ、鎌倉殿に大損をさせてくれよう」と、死を決して待ち構えた。

高綱はそれとも知らずに通ると、景季はその行手に立ち塞がって、「佐々木殿、お久しぶりでござる。あの馬は頼朝公から頂いたのか？」といきなり言いかけた。その殺気立った顔を見ると、高綱は頼朝の注意したのはここだなど悟ったので、にっこりと笑いながら、「とんでもない。生唼は貴殿や範頼公にも下さらなかったというではないか。況して高綱などに賜るものか。



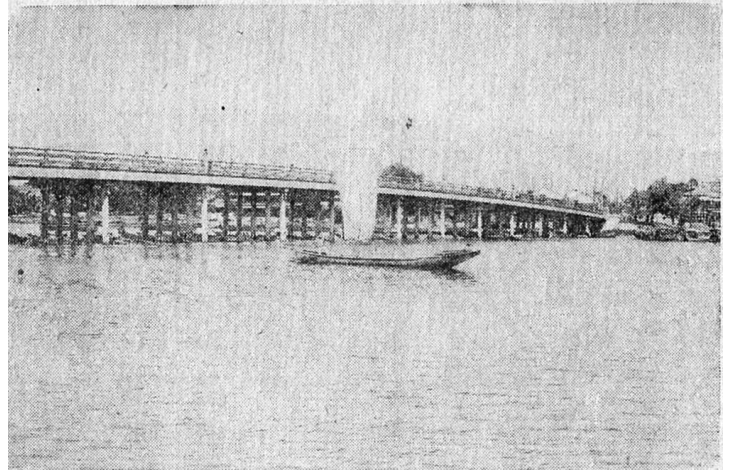
といっても、今度の事は君の御大事であるのに、馬が無くては出陣が出来ないから、実はお厩から盗み出して来たのだ。

もし、後日、お答めのある時には、貴殿も共にお詫びをしてくれたまえ」といって、景季の怒りも俄かに解けて、「そうか、それならば、景季も盗めばよかったのに。正直では良い馬は手に入らない」と言いながら、それからは打連れ立って進んだ。

さて、六万余騎の鎌倉勢は、尾張の熱田で 2 手に分かれて、範頼は 35,000 余騎を率いて正面の勢多に向い、義経は 25,000 余騎を率いて伊勢路から搦め手の宇治に向った。

よしなか
都を守る義仲

一方、^{よしなか}義仲は、その時、都にはいくらかも^{ぐんぜい}軍勢を持っていなかった。既に11月19日に^{すで}法皇の御所に押寄せた時から、その軍勢はだいぶ減っていた上に、^{かたうで}彼が片腕とも頼む^{たの ひぐち じろうかねみつ}樋口次郎兼光は、この時、^{ゆきいえ}行家を攻めに河内の国に行っていた。それで義仲は、残った^{ぜい}勢の中から500余騎を^{いまい}今井^{しろうかねひら}四郎兼平らに授けて^{さづ}勢多を守らせ、300余騎を^ね根^{いのゆきちか}井行親らに授けて^{ふせ}宇治を防がせた。そして自分



滋賀 勢多の唐橋

は^{わづ}僅かに100騎ばかりの^{てぜい ひき}手勢を率いて^{いくさ もよう わる}法皇の御所をお守りしていた。勢多や宇治の軍の模様が悪かったら、^{ほう}法皇を奉じて京都を出ようというのが彼の考えだったのでした。

時は^{のりより}寿永3年正月20日、^{よしつね}範頼の軍は勢多に、^{よしつね}義経の軍は宇治に着いた。春はまだ浅かったが、山々の雪がそろそろ解け出した頃ですから、琵琶湖の水は増して、勢多も、宇治も、溢れるほどの川水は漫々と底も見せずに流れている。^{よしなか}義仲の方では、^{もちろん}勿論、橋を引き、^{そこ}水の底には^{らんくい}乱杭を打って^{たいこう}大綱を張り、^{さか}逆^{もてぎ つな}茂木を繋いで^{なが}流しかけている。^{たいが さかま}防ぐ軍兵が少ないので、この大河の逆巻く水を利用して^{く と}敵を食い止めようとしたのであります。

うちがわ せんじん
宇治川の先陣

^{よしつね}義経は川の岸に近く^{たかやぐら つく}高櫓を造らせて、その上に登って^{めい くだ}全軍に命を下した。「人に先だって進む者と^{いさ}勇ましく戦う者とは、一々その名を記して^{な しる}鎌倉殿にお目にかけるぞ。われと思わん者どもは、^{よろい ん}鎧を脱いで^{せぶみ}瀬踏（^せ訳注：瀬の深淺を踏み測ること）をして見よ。向いの岸を見るに、4 - 500騎の敵が控えている。瀬踏みをしようとする者があれば^い射しようとするだろう。勇気のある者は^{ゆうき}馬を捨てて^す橋桁を渡って、向かいの岸の軍兵を^{お ほう}追い払って、瀬踏みをしようとする者どもを思うように^{はたら}働かせよ」と。

これを聞くと真っ先に^{ひらやまのむしやどころ すえしげ}平山武者所^{ささきのたろう さだつな くまがいじろう なおぎね}季重、つづいて^{とびお}佐々木太郎定綱、^{とびお}熊谷次郎直実らが馬から飛下り、^{はしげた}橋桁の上に走り上がって、^{いはじ}敵を射始めた。^{はたけやましげただ}畠山重忠は真っ先に川を渡ろうとその用意をしていると、^{びょうどういん}平等院の東北に当る^{あた}橋の^{たちばな}小島ヶ崎から^{こじま さき}若武者が^{わかむしや}2騎駆け出した。1騎は^か梶原源太景季、1騎は^{かぢわらげんた かげすえ}佐々木^{ささ}四郎高綱である。^{き しろう たかつな}梶原は4,5間（約8m）ばかりも先に進んだ。

^{ささき}佐々木は後から^{あと}聲をかけて、「いかに^{こえ}梶原殿、^{かぢわら}腹帯が延びて見えぬぞ、この川は^{はらおび}大事の渡りだ。河中^{の み}で^{だいじ}鞍を踏み返して^{わた}敵に笑われたもうな」と言うと、^{かわなか}梶原は尤もな事だと思ったのか、馬を留めて^{くら}腹帯を締^{ふ かえ}直した。^{から}梶原は、この間に、つとそこを^{はせぬ}馳抜けて、^{かわ}河に^{うちい}さっと打入った。

さては^{たば}証かれたかと^{かぢわら}梶原も続いてさっと打ち入って、「いかに^{ささき}佐々木殿、^{こうみょう}高名をしようとしくじりたもうな。水の底には^{おおつな}大綱が張ってあろうに。気をつけたまえ」というと、^{ささき}佐々木はもつともな事だと思ったのか、^{たちぬ}太刀を抜いて馬の足にかかった^{ささき}大綱を、ふつ、ふつと打ち切り打ち切り、^{いげつき}生啜という日本一

第18話 源氏の同士討ち

めいば の の名馬に乗ったればこそ、一直線に川を渡して、さっと向こうの岸に上った。

かぢわら するすみ なかほど ゆみがた お なが はる
梶原が乗った磨墨は川の中程から弓形に押し流されて、遥かに下で岸にのぼった。 その時にはもう
たかつな だいおんじょう じゅうにん さ さ き しろう たかつな な の
高綱が大音声をあげて、「近江の国の住人、佐々木四郎高綱、宇治川の先陣」と名告っているのが聞こえた。 果たして、彼は頼朝に誓った通りに先陣をしたのでした。

はたけやましげただ よしつね
二人に続いて、畠山重忠は500騎の手勢を率いて渡り、総大将の義経もまた、自ら大軍の先に立って渡ったので、敵はいくらの勢でもなかったもので、一たまりもなく京都を指して逃げ帰った。

敗れた義仲

よしなか
義仲は院の御所をお守りしながら、いくさ なかなか
軍はまだ中々と思っているうちに、早くもうぢがた やぶ
聞くと、この上はごしらかわ のが
後白河法皇を奉じて北陸道へ遁れる外に道はない。 法皇に無理に御行をお迫りしたが、
よしつね
義経らの進軍があまりにも急であったので、そのひまもなく、僅かに百騎ばかりを率いて、目に余る鎌倉
まんなか
勢の真中に切込んだ。 さんざんに戦った後に、やっとかこぬ
と囲みを抜けて琵琶湖の方に落ちて行った時には
しゅじゅう
主従わづかに7騎でした。

今井兼平

いまいかねひら
おおつ はま
大津の濱まで行くと、勢多で敗れたいまいかねひら
今井兼平が向こうから落ちて来ると逢った。 よしなか かねひら
義仲は兼平の手
と
を執って、「京都で討ち死にするところであったが、もう一度お前に逢いたいと思って切り抜けて来た」と
いとう かねひら
いうと、兼平も涙を流して、「わたくしも勢多で討ち死にとぞんじましたが、どうなされたかと、それが気
にかかって、ここまで遁れてまいりました」といった。 よしなか えん つ
義仲は2人の縁がまだ尽きなかったのだ、では
いといくさ
今一戦して、あわよくば一方を切破って北陸に赴こうと、かねひら
兼平に旗を高く揚げさせると、身方の兵の都
から落ちて来た者や勢多から来た者が、ここかしこから20騎、30騎と馳集って、程なく300騎ばかりと
なった。



あわづ
琵琶湖南端 大津 栗津の松原

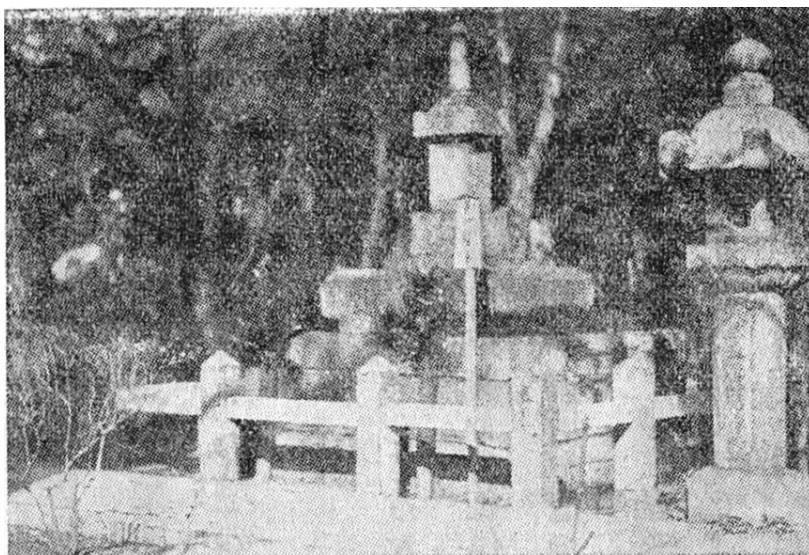
しかし鎌倉勢は、そういううちにも3,000騎、2,000騎、5,000騎というように、りくぞく
陸続と勢多口から進んで来る。 これを一々破って通って行くうちに、いつか300騎もまた残らず討たれて、ついによしなか かねひら
義仲と兼平、
かねひら
主従2騎となった。 兼平は、今はこれまでと覚悟を極め、「ここはわたしが防ぎますから、あの向こうに

第18話 源氏の同士討ち

見える松原の中で、心静かにご自害なさいませ」というと、義仲はどこまでも兼平と一緒に討死するといっ
て聴かなかつた。兼平は、「大將軍ともいわれる者が、つまらぬ者の手にかかって死んではなりません」と固く諫めたので、義仲は、さらばとて、ただ1騎、栗津の松原へ向って駆けた。

義仲の最後

折から夕暮れの事で、足許もはっきりしない上に、薄氷が張っていたから、義仲は深田があるとも知らずに馬をさっと乗入ると、あっという間もなく、泥田に深く踏込んで、馬の頭も見えなかつた。引けども、打けども、動かない。そういううちにも兼平の事が気にかかって、どうしたろうと振り仰いで見る拍子に、敵の狙っていた矢が眉間に中って、義仲はついに殺されました。時に年は31才でした。



滋賀県 大津

木曾義仲の墓

兼平の最後

兼平はこれを見て、今は誰のためにか軍をしようと、箆に残る8本の矢で8騎を射落とした後に、太刀を抜いて、「日本一の剛の者が、主人のお供に自害する手本を見よ！」とて、太刀の鋒先を口に啣えて、馬から逆さまに落ちて貫かれて死んだ。年は33でした。今、義仲の墓は大津市の義仲寺に在り、兼平の墓は栗津の松原から3町ばかり離れた田の中に在ります。

朝日將軍の名

実に義仲は、兵を挙げてから僅かに3年半で滅びた。寿永3年1月11日に従四位下に叙し、征夷大將軍を拜してからは、僅かに10日に過ぎなかつた。彼は、いわば、頼朝のために平家を京都から追払う役目を勤めたようなもので、いわゆる犬骨折って鷹にさらわれたのですが、しかし初め、彼が北国から押出して来た時の勢いがいかにも目ざましく、朝日のさしのぼるにも似ているために、世人に呼ばれた朝日將軍の名は、今もなお世に語りつたえられて涙びずに居ます。

(第18話 源氏の同士討ち 終わり。 次は前頁に戻り、第19話 平氏の滅亡へ)